

安仁神社元宮・亀の形をした岩座と 16 菊の御紋章

先史古代研究会 丸谷憲二

1 はじめに

安仁神社の元宮に関する調査報告は無い。木村堅一氏の鶴山山頂での「祭祀を行うに適した大岩発見」報告のみである。これは大岩発見であり岩座発見報告では無い。浦上宏氏より「岩座と聞いている。訪問するように。」と教示されている。

2 安仁神社の元宮

元宮の鎮座地は 2 説ある。「山頂であるが山の名前は不明」説と「古の本殿は山上にあり」説である。両説とも小林久磨雄説である。

2.1 往古は山頂に在り 山名は不明説

邑久郡教育会は明治 36 年初めて『邑久郡誌』の編纂に着手し、大正 6 年全三巻の刊行を終わった。『邑久郡誌 第二編』は小林久磨雄氏が大正 2～4 年にかけて編纂し大正 6 年 10 月に発刊したものである。「往古は山の頂に在りしが、中古・尾の上（鶴山の北方）に遷座し、後、宝永二年（1705）池田綱政現在地に遷し奉る」とある。明治時代末の伝承は、「山頂であるが山の名前は不明」であり、現在地まで 2 度遷座している。

2.2 古の本殿は鶴山山上説

邑久郡教育会は昭和 10 年、更に増補改訂を小林久磨雄氏に委嘱し、昭和 20 年 10 月発刊した。「古の本殿は山上にあり、戦国の時麓に遷す。今の稲荷の処なり、其後備前少将源綱政朝臣今の処に遷して造営し給ふ」とある。「古の本殿は山上にあり」と、鶴山の山上と読めるが、三原千幸宮司は「山内に其れらしい跡は無い。」と教示され、木村堅一氏も「旧社地は見つからぬ。」と報告している。

2.3 鶴山山上で大岩発見

木村堅一氏の鶴山山頂での「祭祀を行うに適した大岩発見」報告がある。「それは高さ約 1.5m、幅 2m の岩であった。岩の上は平坦で畳の広さで一畳少々である。祭祀を行うに適している。・・・岩の上に登ってみると、丸山や綱掛石神社の方向がよく見える位置関係にあった。」と。しかし、これは岩座発見報告では無い。木村堅一氏が鶴山山頂で発見した「祭祀を行うに適した大岩」に、古代祭祀の痕跡があるかの確認が必要である。大岩が全て岩座では無い。

3 永倉山山頂岩座 16 菊花紋章の祠

「山頂であるが山の名前は不明」とある。小林久磨雄氏は『改訂 邑久郡史下巻』に、（邑久郡史料として）「千手山の古文書に安仁神社社領といふ事あり」と記録している。

この安仁神社社領を元宮と読むと、永倉山山頂岩座が安仁神社元宮の岩座となる。根拠は 2 つ。1 つは、宮城山（鶴山）も永倉山も山の神山脈に属しており近くである。2 つは、岩座の「16 菊花紋」である。安仁神社本殿の最大の特徴は、16 菊花紋の多さにある。遥拝

所では天神社に 16 菊花紋があり、安仁神社近くの山頂での 16 菊花紋は永倉山山頂岩座のみである。

3.1 永倉山山頂岩座 岡崎春樹氏の調査報告

永倉山山頂の岩座は、岡崎春樹氏が「地主権現宮の奥之院」と報告し、地主権現を神武天皇の父のウガヤフキアエズノミコト（限建鵜葺草葺不合命）としている。安仁神社の祭神は神武天皇の父の祭祀で完結する。この場所は岡崎春樹氏が友人と二人で、大切な場所として長年お祭りしてきている。

岡崎春樹説

『岡山市大宮地区』字藤井の安仁（兄）神社に、【帰化第四代】の、五瀬命・稲飯命・三毛入野命の三柱が鎮座され、『瀬戸内市旧大宮村』字千手の「天智天皇御勅願弘法寺」の地主権現宮・山王権現宮は【帰化第三代と四代】の神武天皇親子であり、《奥之院》の、永倉山の峰に、【帰化第三代】のウガヤ王の【陵】と伝えられ、その峰の「菊花の紋章の祠」を指しており、そこを「日向の吾平山上（わがひらやまかみ）の陵（みささぎ）に葬（ほうむり）祭った」と記載されています。

『大宮村』には、神武天皇親兄弟が鎮座される。と口碑に伝えられる。又、岡山城築城者、宇喜多秀家は幼くして豊臣秀吉の養子として繁栄の中で育てられた。秀家は、豊臣秀家と豊臣姓を頂き、『天智天皇勅願寺』の「弘法寺」に文禄三年（1594）と四年（1595）に、二回に分けて、百四十石の寄進状が伝わります。『大宮村』は「神武天皇の親子」が鎮座されます。永倉山の峰に宇喜多秀家が、《菊花の紋章の石の祠を寄進された。》と伝えられます。

3.2 永倉山山頂岩座へのルート



永倉山に報恩大師の供養塔がある。車道左側に報恩山参道表示がある。表示にそって左折する。5 分程で電柱が見える。電柱下が駐車場である。右折すると N T T ドコモの電波塔がある。尾根にそって歩き 5 分程で山頂に到着する。

報恩山参道 4 丁・享和元年（1801）1 月

電柱を右折すると、報恩大師の供養塔がある。

尾根の参道より、参拝者が多かったことがわかる。



3.3 亀の形をした岩座と 16 菊の御紋章

山頂の岩座上に石の祠があり、皇室の 16 菊の御紋章が刻まれている。



4 皇室の菊花紋

家紋の起源は公家と武家とでは異なっている。公家は平安時代（794～1185 年）末期から鎌倉時代（1185 頃～1333 年）である。しかし、菊花紋は、明治維新後に「菊は栄える葵は枯れる」に代表されるように、皇室の権威回復と共に光芒を放ち、葵紋は地に落ちた。明治元年 3 月 28 日の「太政官布告第 195 号」で皇室以外の菊花紋使用が禁止された。明治 2 年には、皇室の紋は 16 弁八重の表菊と決定された。つまり、永倉山山頂岩座菊花紋は江戸時代以前の刻印である。桜井秀氏は、後鳥羽上皇が菊花紋を用いたのは寛元 4 年（1246）

と報告している。菊花紋を用いるのは名誉であり権威である。社寺の菊花紋は勅許の記録の確認が必要である。

4.1 勅使

安仁神社は勅祭社であった。勅祭社には祭礼に際して天皇より勅使が遣わされる。(勅祭)勅使は天皇の代理として宣旨を伝達する。勅使を受け入れる寺社には勅使専用の部屋や門が造られていた。平安後期になると律令制の衰退とともに遠隔の諸大社への奉幣は避けられ、京に近い神社が有力氏族や民衆の崇敬を集めて固定化され、新たな社格ともいえる二十二社が制度として成立した。

4.2 勅使屋敷跡の記録

『安仁神社御由緒調査書』に、「従本宮距離三町子丑ノ方本村ノ内字ナ御堀ト云田地ノ中ニ一魂式坪計リノ地所残跡セリ。此は往昔当社へ勅使を立給ひし時の説ありし旧跡なり。」との記録がある。安仁神社の勅使屋敷跡の記録は平安時代の記録である。勅使屋敷跡、御堀ト云田地跡はまだ発見できない。

5 まとめ

はるか上代においては神を祀る社殿はなかった。古来の有力神社には本殿が無い。元宮は近くの山の山上にあった事例が多い。安仁神社の元宮は、永倉山山頂の亀の形をした岩座である。安仁神社本殿の最大の特徴は 16 菊花紋の多さにある。安仁神社近くの山頂で 16 菊花紋は永倉山山頂岩座のみである。報恩大師の供養塔は安仁神社の亀の形をした岩座を遙拝している。岡崎春樹説で神武天皇ファミリーは完成する。



6 参考文献

- ① 『邑久郡史下巻』 小林久磨雄 昭和29年 邑久郡史刊行会
- ② 『邑久郡誌 第二編』 小林久磨雄 昭和48年 名著出版
- ③ 『邑久郡誌 第三編』 小林久磨雄 昭和48年 名著出版
- ④ 『岡山の山と三角点』 <http://www.geocities.jp/komaithi/b/index.htm>
- ⑤ 『吉備に邪馬台国 瀬戸内市（旧邑久郡）の歴史』 岡崎春樹編 平成25年12月
- ⑥ 「安仁神社と方位」 木村堅一 『西大寺 第七号』 昭和56年12月 西大寺愛郷会
- ⑦ 『日本紋章学』 沼田頼輔 昭和47年 新人物往来社
- ⑧ 『日本家紋総覧』 千鹿野茂 平成5年 角川書店